
赤い巨人

ズラえもん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い巨人

【Nコード】

N5569E

【作者名】

ズラえもん

【あらすじ】

かつて、美しい地球と人間たちの心に感動した大巨人は、地球侵略を企む異星人と命をかけて戦った・・・そして、40年ぶりに地球に降り立った大巨人、しかしそこで見た光景は・・・！！

(前書き)

これは、私が子供の頃夢中になっていたテレビ番組 ウルトラ・セブンのラストシーンを思い浮かべながら書き上げたものです。

昭和30～40年生まれ男性なら、共感してもらえるかも・・・そのときのヒーローとヒロインを現代に持ってきたのですが、あえて名前は出さないようにしてみました。

※レオ及び平成版ウルトラシリーズでセブンが登場していますが、ここではその部分は除外しています。

赤い巨人・・・それは突然やって来た。

高層ビルをなぎ倒し、ダムを破壊した。

巨人は人間達の造り上げた建造物を、次から次へと破壊して行く！

高速道路を踏み潰し、工業排水により汚染された河川の水を町中に振り撒く。 辺り一面に汚水の強烈な匂いが充満し、人々は暴れ狂う巨人から逃げ惑う！

いたるところから炎が吹き上がり町中はパニックに陥っていた。

そんななか、暴れる巨人に向かって駆けて行く1人の女の姿があった。

女の年齢はすでに60歳を過ぎているだろうか？ 時折立ち止まると口元に手を当て激しく咳き込む、そのたびにしゃがみこみ苦しうに肩で大きく息をした。

息を整えまた駆け出し、咳き込んでしゃがみこむ。

襲い来る咳と足元の縛れから、何度も転びそうになりながら必死に駆けるその姿からは、彼女の体力の衰えを感じさせた。

巨人はひとしきり暴れると海に向かって歩き出した。

岩場に立ち、水平線の彼方に目を向ける・・・そんな大巨人の姿は心なしか悲しげに見えた！

女は息を切らしながら岬の上にたどり着いた。

そこは大巨人の顔の高さとほぼ同じであり、女に気付いた大巨人はゆっくりと女に近づいたのだった！

女は瞳を潤ませながら、大巨人に言った！

「やっと会えたのね！ 私はこの日が来るのを心待ちにしていた・・・それなのになぜ？ どうして？ あなたは暴れているの？」

大巨人は女を見つめ、まるで天から降り注ぐような声で言った。

「君は・・・いや・・・地球人は、私の事を忘れてしまっている。」

女は大巨人の予期せぬ言葉に驚き

「えっ！ な・何を言うの！ 私は・・・私は・・・あなたのことを忘れたりしない。 40年前のあの日から・・・私は1日たりともあなたの事を忘れた事など無かったわ！

私はもう一度あなたに会いたくて、きっと会えると信じて毎日この場所に來ていたのよ。

あの日、あなたが私の前からいなくなったこの場所に・・・！」

大巨人は海岸に打ち寄せるゴミとともに、工業排水で汚れた海水を手のひらで掬い上げ岩礁に投げつけた。

ゴミに混じっていたペットボトルが弾け、大きな音たてる・・・

大巨人が再び口を開いた。

「忘れていない？ ではこれはなんなんだ？ 一体どうなってしまったんだ？ 私も君に会えることを楽しみに、こうしてはるばるやって来た・・・だか、第二の故郷だと思っていたこの地球に降り立った私は、あまりの事に愕然となってしまったではないか！ あれほど美しかった地球が、なぜこれほどまでに薄汚れた星に変わってしまったんだ？

濾過しなければ飲めない水・・・工場からは黒煙が絶え間なく立ち上り、視界を遮るほどに漂っている！

騒音を撒き散らす高速道路に、魚が住めないほど汚染された川・・・

・君たち人間の私利私欲による森林伐採やダム建設で、今や他の動物達の生態系もが異常を来し始めているではないか。

私はこんな物を守るために命を賭けて戦ったのか？

私が愛した美しい地球は・・・他人を思いやる人間の優しい心は一体何処へ行ってしまったんだ？」

大巨人の声は怒りに震えていた。

嘆き悲しむ大巨人の前に、女はガックリと膝まづいた。

「ごめんなさい・・・確かに・・・確かにあなたの言う通りだわ！

今地球では、たくさんの環境問題を抱えています・・・それは全て人間達のエゴが招いたもの・・・でも、その問題に真剣に取り組んでいるのはごく一部の人間だけ・・・大半の人は他人事のように遠くから眺めるだけです！

誰もが損得勘定でしか、その重い腰をあげようとはしない！
40年前、あなたが命懸けで教えてくれた、もっとも大切な物を、今の人間達は忘れてしまっているのよ・・・！」

女の中から一筋の涙が頬を伝った。

大巨人は悲しげに肩を落とし

「かつて私は、この地球を侵略しようとして来る異星人と戦った・・・美しい地球を守るため、身も心もボロボロになるまで・・・しかし、私は大きな間違いを犯していたようだ・・・地球の本当の敵は異星人ではなく、君たち人間だったんだ！！」

女の心を見透かすかのように大巨人の目が青く光った。

「君とは、笑って再会したかった・・・それがこんな形になろうとは！　でも、会えて良かった・・・地球は変わってしまったも、君は姿も心もあのときのままだ！　私はもう2度と地球に来ることはないだろう・・・。」

そう言い残し、大巨人が飛び立とうとした時、女がそれを制した！

「待って・・・ちょっと待って・・・あなたは今私に会えて良かった」

たと言った。

でもこの地球は、きつとこの先人間のエゴのために崩壊するでしょう……だから、だから私はあなたについて行きたいの！

あなたの愛した地球が滅び行く姿を、私は……私は見たく無いから……」

そう言って大巨人を見つめる女の目は、40年前の若き日の色そのままに美しい光を放っていた。

大巨人は女の意味が固いことを確認すると、その身体を両手でそつと包み込み、そのまま宇宙の彼方へと飛び立っていったのであった！

翌日……まだ夜も明け切らぬ岬の上、2人の男が横たわる女を見つめていた。

年長と見られる男が言った。

「フルハシ君、人生とは実に皮肉なものだね……公害病を食い止めようと必死で戦っていた彼女自身が公害病で命をおとすとは……」

「ええ……でも、キリヤマさん！　彼女のこの幸せそうな顔を見てください、長い間気管支喘息で苦しんだとは思えないくらい晴れやかに……まるで私には彼女が笑ってるように見えますよ。」

「うん！　確かに……こんな幸せそうな顔の彼女は久しぶりに見た気がする……きつと彼女は“あいつ”に会えたんだ……ずつと会いたがってた“あいつ”に……」

2人はうなずきながら顔を見合わせると、そっと女の手を握った。

眠るように穏やかな表情の彼女を見つめていた2人が、ふと 西の空を見上げたとき・・・

そこにはまるで、横たわる彼女をやさしく見守るかのように、明けの明星がひとときわ明るく輝いていた。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5569e/>

赤い大巨人

2011年1月12日22時37分発行